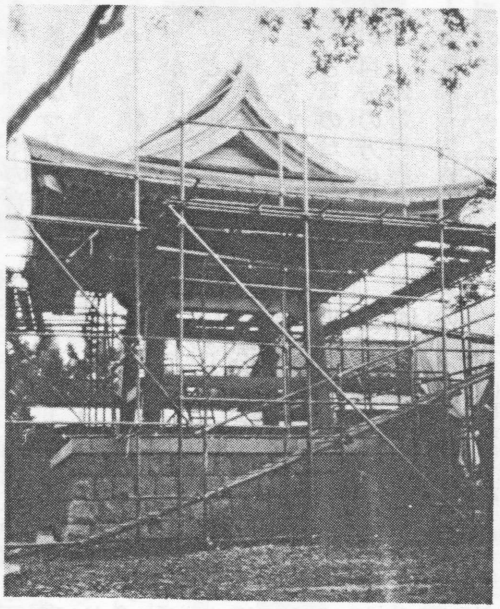
廣福寺だより

7号

鐘楼再建工事すすむ

当山鐘楼再建事業は門信徒はもとより地元桜井郷、長辰はじめ県外も含め広く有縁の方々の愛山護法の御懇念によりまして募財も当初の目標を上回る成果をあげることができました。ひとえに仏法力のしからしむるところ感激にたえません。

工事経過は次のとおりすすみました。四月二十四日旧基壇撤去、五月一日起工式、基礎工事着工、十六日石工事着工、二十四日原寸図立合い、六月二十一日材木検査搬入、七月三十日木工事着工、八月二十日上棟式板金工事着工、二十四日梵鐘吊り上げもすませ九月十五日の竣工を待つばかりとなりました。

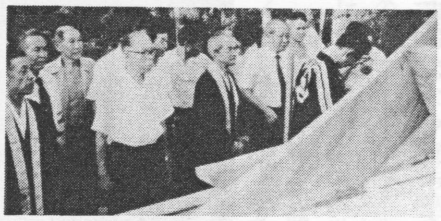


工事関係者は次の各氏、設計者東京　幸和建築事務所　柏原恵行、請負者　観音寺　隼野建設　竹田健治、名誉棟梁　弥彦　渡辺道雄、匠　本間栄治郎、山崎博、永島章智、棚橋勝夫、山上栄一、棚橋芳秀、本間和栄、伊藤義夫、池茂、欅出材　巻北越銘木センター、桧葉出材　酒田㈱モトタテ、石工　安田　熊倉誠八、釣巻利夫、高橋昭栄、板金　石瀬　小池正雄、錺金具　巻石川仏壇金具店、梵鐘吊金具　高岡　老子製作所、撞木　奈良　上田技研工業㈱、風鐸　福井　林大仏堂、基礎工事　土工頭　清水一男。炎天下の工事、御苦労さまでした。

落慶法要

九月二十二日に厳修

九月二十二日午前十時鐘楼再建落慶法要、引続き前住職三回忌、前坊守三十七回忌法要をつとめ鐘楼竣工式の後、おとき（三千円程度のまかないを予定）という日程を組んでおります。ここに機縁熟し広く有縁の方々の御懇念の結晶として竣工をみた木の香も新しい鐘楼から久しぶりに如来招喚の大音が響きわたります。皆さんお誘合せて多数御参詣下さるよう御案内申し上げます。お参りいただける方は十二日ころまでに世話方にお申込み願います。＜世話方のおいでにならない地区の方は直接寺まで電話でお申込み願います。＞



〈写真は上棟式（上）と起工式（下）〉

ほんとうの音を護る新鐘楼

聖徳寺住職　窪沢泰忍

あなたも私も生きている中は、種々の音を耳にしてきた。どの音が一番よかったと思いなさる。

なんたって〝札タバ〟を自分の手でかぞえる時の音がステキだと、みんな内心期待して一生大した音もたてられないで、くやしそうに終わる人が多いようです。なにしろ、いくらいい音たてても、きりのない欲で音をきくもんで満足できない自分の方に責任がありそうですね。

カラオケから音楽の音も音に酔うてウットリする楽しみもあるが、その時かぎりでね。

親の声もありがたくきこえるのは、何べんもなくて、時には憎ったらしく、うらめしく忠言が耳に痛いことがいっぱいでしたよ。その親が死んでから、法事の時になると、もっともげな、親思いげな挨拶はしてみるけど親の音に罪を感ずる老境も多いようです。

女房の音となると、結婚前はともかく、一緒になったが身の因果で、さんざお世話になっているくせに小うるさく、その音を尻にきかせるだけの男性もすくなくございません。

夫の音も耳鼻入れぬ妻も……。

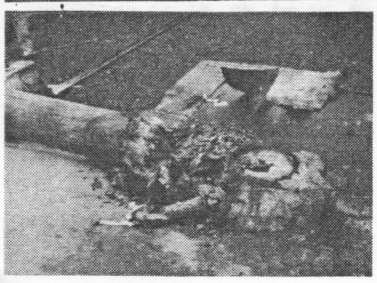
耳ざわりのよい音だけききたがって住職の法話など、たまさか耳にしても、ねむけがさしてきがちで、飛びつくような感激もおきてこない様子がみられます。耳にしてわかる音は、それでも利害や、都合不都合になると、きき耳たてますが、お経の声となると、〝ありがたいトコ少々〟なんて注文するフトドキ者になり勝ちでございます。

今どき、わからない音のひびきをきく読経のひとときの重みにめざめないと、これからの情報化時代に神経の方がお先きにまいって本当の音のめぐみを知らずに一生を空まわりして終わります。

鐘の音は、み仏の声といわれます。お寺の鐘は、一つの家庭です。百八ツのイボのある乳の間(マ)。龍や天女の舞う池の間、八ツの蓮華をつく撞き座。そして全体を上から護る龍頭(リュウズ)。鐘の中味は、銅八十五パーセント。スズ十五パーセント。その家族的調和からひびきわたる音は、世の中安穏なれ、仏法ひろまれとよびかける如来さまのお声です。どこの寺でも朝に夕に、この鐘をつく前後には、かならず鐘に合掌します。鐘は単なる金属でなくて、如来さまの御化身だからです。

私は十五万回ついて当院にゆずりました。東京へ入院して上野の鐘、長野へ入院して寺町の鐘、長岡へ入院して寺々の鐘が早朝ひびきました。病苦をこえて立ち上がらせてくれた音でした。鐘の音は、無量寿の故郷です。

さて、広福寺様のお鐘のあらたな仏壇、つまりすばらしい鐘楼の開眼を迎えます。残念ながら先約で四国へ説教に参るので失礼いたしますが、お鐘の音を護る新鐘楼の聖誕に合掌いたします。



〈写真は取壊し工事、朽ち果てていた柱の根元〉

〈俳句〉

観音寺　森田一美

次ぎ啼けば次の蜩　また啼けり
百合ひらく前の鏡に　自分を見
今宵逢ふ　牽牛織女の星祭り
新涼の縁に月照り　笛の呀ゆ
地下足袋の臭い来、中の昼寝かな

鐘楼募財状況・中間報告

鐘楼再建事業の募財は今春から趣意書を配布してすすめられてきましたが、おかげさまで、総額一五〇〇万の目標を上回る一七一二万五千円（八月二十六日現在）の上納をいただきました。内訳は門徒勧金一二六三万二千円、近郷近在の他門徒の方々はじめ広く有縁の方々から寄せられました懇志三一一万三千円、寺族懇志一三八万円となっております。梵鐘に寄せられました御懇念まことにありがたく御礼を申し上げます。

門徒勧金

門徒勧金は一戸当たり五万円を目標にお願いいたしましたところ次の方々から目標を上回る上納をいただきました。（敬称略、順不同）

一金壱百五万円
燕　大谷統司

一金参拾万円
麓二区　堀内甚兵衛

一金弐拾万円
麓二区　小林治右ェ門

一金壱拾万円
麓二区　山岸与一郎
平岡清蔵
武石新左ェ門
近山五左ェ門
小林栄蔵
渡辺賢吉
麓一区　武石金五郎
木村郷左ェ門
小松省吾
武石太六
武石和左ェ門
加藤与右ェ門
本町　広沢和夫
和納　有坂三四
燕　吉田　本間只雄
新潟　松宮皆義
東京　松宮信一

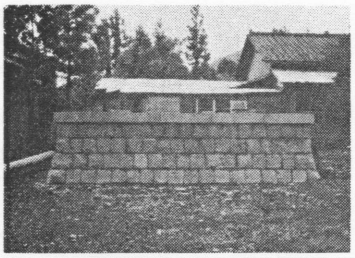
一金七万円
麓二区　鈴木七次郎
千葉　丸山国男

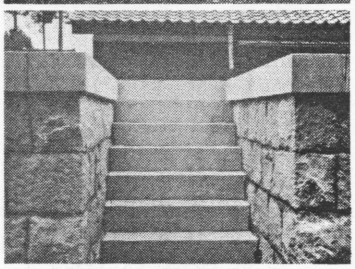
一金六万円
幕島　八子孫兵衛
井田　丸山ムツ
相模原　中村静枝

懇志

一金壱拾万円
麓二区　堀内藤右ェ門
吉田　青木住宅産業株式会社
函館　本間祐介

一金五万円
上泉　本間道夫
麓一区　本間源三
東京　山岸勉
弥彦　岩月庄吉
佐藤真次郎





鐘楼の基壇と昇降階段（安田ミカゲ）

一金参万円
麓一区　本間吾郎
度会精宝
東京　阿部吉伸
阿部勝男
弥彦　一の宮観光タクシー
坂本トヨ

一金弐万円
麓二区　小林彦七
山崎馬場屋
阿部桝田屋
鈴木昇
堀内義一
武石太木一
観音寺　早福寿作
村山　滝川栄一
風間太平
清水与三ェ門
村山　丸山五左ェ門
山崎重助
橋本善次郎
走出　小林輝一
源八　近藤新一
東京　笠原吉五郎
矢作　小森正夫
渡辺岩保
吉田　割烹けやき

一金壱万五千円
麓二区　本多安左ェ門
森田幸平
稲葉秋男
細谷寛
稲葉龍男
加藤八郎
村山　山崎由右ェ門
吉田　武石石材店

一金壱万円
石瀬　寒河江真爾
麓二区　武石弥右ェ門
清水弥六
小林忠吉
小林忠左ェ門
徳永甚五ェ門
菅原関左ェ門
藤田虎夫
武石栄次
麓二区　藤田平吉
渡辺角蔵
村上進
藤田正次
小林徳太郎
堀内栄蔵
伊藤間右ェ門
中村野右ェ門
五十嵐藤助
武石出来津屋
丸山敏雄
早川喜幸
阿部益栄
遠藤竹男
富田半右ェ門
富田啓作
番隆夫
広沢彦兵衛
五野上佐次右ェ門
山野上誠一
伊藤善蔵
本間孫右ェ門
細谷幸蔵
五十嵐留平
五十嵐喜一
五十嵐茂
森田喜右ェ門
稲葉新右ェ門
細谷賢司
伊藤定

一金壱万円

麓二区　棚橋勝夫
麓一区　本多庄右ェ門
本多啓左ェ門
伊藤常右ェ門
和田二六
本間栄男
本多勘兵
本多嘉之助
池田代次
志田金次
橋本享英
佐藤文雄
丸山盛夫
本間カウ
橋本昭治
伊藤間平
樋浦徳松
平井譲一
樋浦祐一郎

麓一区　稲葉仁作
伊藤至
阿部祐松
武石マツエ
丸山五三郎
丸山惣一
丸山勝右ェ門
行田勘太郎
稲葉源次郎
伊藤佐十
風間清太郎
武石三右ェ門
稲葉太治兵衛
稲葉武右ェ門
丸山粂太郎
本間銀平
稲葉吉雄
武石健一
本多喜柄
本多五郎右ェ門

工着に木工事ツチ音も高く

麓一区　武石嘉右ェ門
若井岱三
丸山重四郎
志田宅雄
志田ハッイ
武石万平
山崎和博
池田長平
武石政治
竹田賢一郎
本間憲司
永井収
本間玄衛
石井四郎右ェ門
和田伍三郎
志田伝九郎
熊木武右ェ門
志田晶子
ワノウ印刷
武石孝子
前山二郎
橋信夫
青木勉
河合紋四郎
治田利七
本多弥三治
加藤国栄
大倉五平
河合森右ェ門
諸橋伴右ェ門

村山　古川平七
信田折右ェ門
橋本太左ェ門
白倉利右ェ門
橋本太四郎
清水与二郎
徳永太助
大倉勝利
橋本善九郎
山崎紋太郎
本多光良
橋本平左ェ門
山崎太右ェ門
青木与八
川上芳夫
橋常右ェ門
徳永竹美
三富宏
上州苑
中村鉱一
本田芳太郎
松宮昭
森庄吉

観音寺
地蔵堂
和納
弥彦
村山

一金五千円

麓二区　松原稔
菅原与五左ェ門
本田幸右ェ門
丸山惣左ェ門
小川武男

麓二区　平原和男
酒井秀明
山野上恒夫
山岸要
五十嵐嘉彦
坂本英二
本間功
高橋俊次
藤田伝四郎
渡辺シズイ
樋浦一二
武石良蔵
本田伝三
青木孝雄
武石森男
青木五郎八
樋浦清四郎
丸山一美
武石賢士郎
武石徳助
丸山久栄
丸山正五
丸山吉秋
池田庄八
丸山広治
丸山作兵衛
本多弥助
丸山仁右ェ門
斎藤一太郎
本間幸男

麓一区　本多正治
丸山和明
伊藤登
本多由雄
和田和忠治
和田五郎
和田佐和一
熊木政次郎
松井幸六
松井伊右ェ門
河上九助
石井奥次郎
村上庄吉
松井長右ェ門
松井啓太郎
松井桶屋
竹之内松雄
松井門兵衛
和田治左ェ門
松井幾右ェ門
河上照治
松井常太
竹之内靖之
大倉五三郎
大倉茂平
川上文男
加藤甚兵衛
若井嘉平
清水与一郎
治田徳松

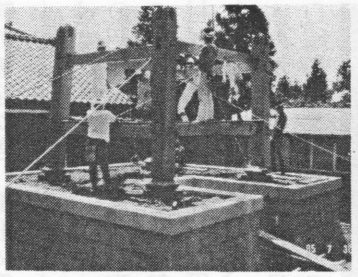
村山　古川文七
長辰　村上門助
古川厚
湧井嘉之助
若井健一
関野半左ェ門
徳永守
松井長次郎
河合三左ェ門
涌井伝右ェ門
丸山テフ子
村上杢右ェ門
観音寺　三富真
山口徳右ェ門
三富新六
吉原兵左ェ門
大柿芳美
しまや
三富清
熊木善五郎
得仙館
松井辰右ェ門
隼野祐蔵
松井常右ェ門
巻　野村実
熊木仙太郎
渡部　多熊衛
山崎源八屋
吉田　佐々木造花店
和田太次兵衛
松井利左ェ門
田村八右ェ門

一金参千円

麓二区　堀内伊八
村山
鈴木秀栄
大倉安夫
信田豊
大倉竹夫
本間徳一
麓一区　伊藤直七
古川省吾
樋浦三次
山崎富一郎
青木善一郎
観音寺
鎌田登美男
武石政右ェ門
青木広治
鈴木彰
大柿久
長辰　松井幸八
徳永芳勇
高橋又市
松田静子
渡辺間左ェ門
吉原伝左ェ門

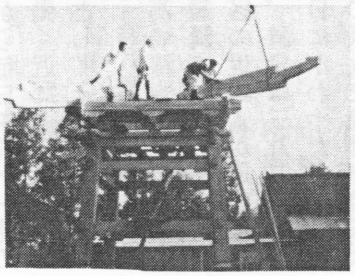
一金弐千円

河上半助
麓一区　鈴木金吉
清水一郎
石川岩雄
青木正市
青木元太郎
池田喜三郎
武石繁男
長辰
高橋善右ェ門
河上自動車
松井彦平


四本柱に腰貫もついた

一金壱千円

麓二区　森田忠次
長辰
松井新宅
松井作右ェ門
河上兵四郎
涌井八十吉
山口高二
ときわや
いなりや
吉田紘
河内勝
和田イネ
熊木六平
和田市四郎
竹之内良雄
田村二三郎
和田一雄
松井源蔵
観音寺　藤原実


屋根の羽木もクレーンで

村山
吉原正男
村上善八
関野正一
和田庄八
吉原八右ェ門
吉原士郎
和田伝四郎
諸橋小右ェ門
観音寺
名古屋ユリ
菊地晴夫
隼野雅春
前山与喜男
隼野寅三
河上菊代
河上誠

一金拾参万円

〈撞木付属品共一式〉
当寺坊守　柏原朝子
新坊守　柏原みゆき

一金壱拾万円

心光寺住職　柏原善了

一金五万円

当寺衆徒　田中恵証
横浜　柏原恵教
安岡彩子

以上

寺族懇志

一金壱百万円

当寺住職　柏原恵信

鐘楼再建落慶法要関係記念品　一式

東京　柏原恵行

これからの寺の行事

9月12日	午後8時	聞法会（歎異抄講話）
9月22日	午前10時	鐘楼落慶法要
9月26日	〈一日勤め〉	彼岸会
10月初旬	午前10時	本山御布教
11月7日	午前10時	報恩講
11月8日	午前10時	
12月31日	午後11時半	除夜の鐘

皆様お誘い合わせてお参り下さるよう御案内申し上げます。

広福寺世話方

〈生活詩〉

婆杉

森田一美

宝光院の　わき道を七分程歩くと
右横に大きな婆杉がある
昔、ここで罪人の処刑があった
古い幾つかの墓が苔むして居る

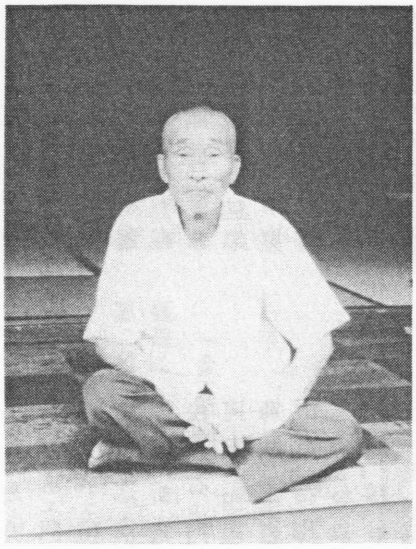
真中に、古井戸がある
罪人の首洗いに使ったと言う
石桶が、置いてある
お役人の怒声が聞えて来るような……
森の中で霊魂が往復する

三人掛りで、廻っても
届かない無気味な婆杉
婆杉はその昔（かみ）の
血を吸って生きて来たと言う

宝光院から、わき道一筋の
婆杉には御堂があって
お花があってお供物も上っている

人達は
「天賦の神」と言い
「守護の神」とも言う

当寺の梵鐘と鐘楼



○寺の記録をたどりその由来をたずねると今から**二百七十一年前**の正徳三年（一七一四）第五世祐円の代に梵鐘が初めて供養され、鐘楼は当寺下通り門徒の寄進で建立された。

○明治三十四年九月五日、第十三世法道の代に梵鐘を**改鋳**、この時から毎日**午前十一時の時の鐘**をつき、田畑に働く近郷近在の村民におひるあがりの時の鐘として永く親しまれてきた。

○昭和三年三月、麓の高嶋清吉殿が時の鐘への報恩感謝の念から**梵鐘講**を結成、桜井郷の村民が講員となり各地区の世話人が運営に当たってきた。発足当時、講日は三月二日であったが、のちに三月九日にかわった。

○昭和十五年五月三日の大火で鐘楼が焼失、六月二日、境内の焼け木を用いて**仮鐘楼**を建立、昨年の取り壊しまで保たれた。当時の世話人は高嶋清吉、菅弁次郎、小林寅治、清水弥六、阿部祐右ェ門、丸山準次、稲葉龍平の七人、請負は渡辺善恵殿で百拾八円弐拾四銭の支払い。

○昭和十六年の梵鐘講は**戦時中**ながら仮本堂で勤め、ときつき人員百五十九名、寄り米壱石八斗、お明し四円参拾五銭、おさい銭五円五拾四銭、残米で経費を支払い拾円を信用組合に預金。

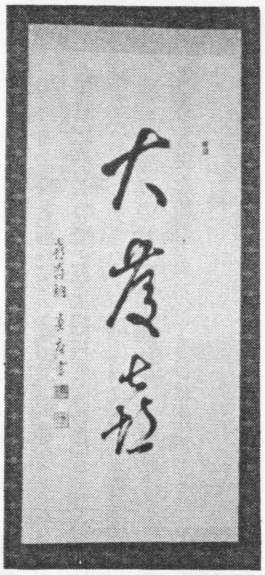
○昭和十七年　戦時体制に入り官の通達で鳴鐘中止、十一月十七日**供出**。お別れの法要があり、青木貞二氏の送別の句に「くろがねの上にも諸行無常かな」とある。

○戦後サイレンで午前十一時を報じてきたが昭和四十一年篤志者本間孝殿の特別懇志に助けられ梵鐘（二百貫）を**新鋳**、以降は毎朝午前六時の鳴鐘を続け今日に至っている。

○昭和五十九年十一月、腐朽のため鐘楼を取り壊し、このたびの**再建**となった。

○現在梵鐘講の**世話人**は菅保氏（写真）が一人で務め運営に当たられている。当寺勝手頭でもあり、寺の行事でこの人の顔の見えぬ時とてなく、門信徒に広く親しまれている。八十を過ぎてなおカクシャク、何かにつけて寺に奉仕を続けておられる奇特な方である。

（森田一美氏の御寄稿、ありがとうございました。）



前住職 三回忌
前坊守三七回忌 自坊法要

鐘楼再建落慶法要に併せて自坊法要を勤めますが、前住職の遺墨をよすがにありし日の両親を偲びたいと思います。

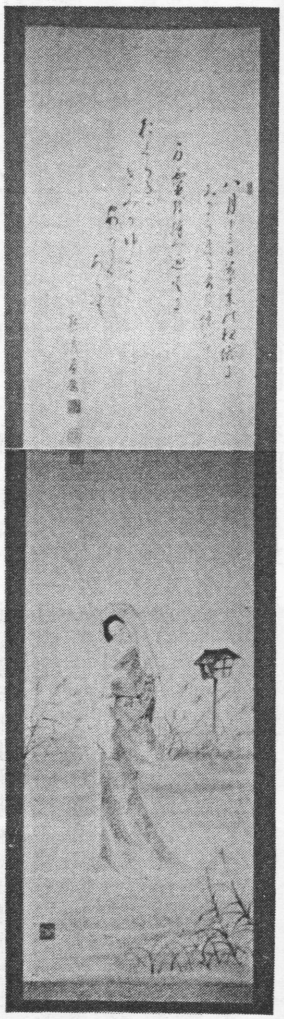
前住職喜寿の年、「大慶喜（ダイキョウキ）」と記念の書を揮毫、お世話になった御法中や身内にさしあげましたが、一幅だけ寺にのこされています。これはお正信偈の「獲信見敬大慶喜」の御文から引用し喜の字をかたどったものです。「信を獲て見て敬ひ大きに慶喜すれば、即ち横に五悪趣を超截す」と続く御文で、御信心を頂いて本願の深いお心を大いに喜べば、たちどころに生死の苦海を超えることができるという意。本当にささやかな祝宴でしたが身内に囲まれた前住職の心をよぎった感懐は、苦難続きの境涯を確かに喜んで生き抜く心のよりどころはまさにこの御文だということでありましょうか。梵鐘に刻まれた「諸行無常」のことわりどおり、米寿の夢は空しく、また元気に同席された浄源寺前住職も昨年の暮れにまるで後を追うようにお浄土へ旅立ってしまわれました。＜写真は喜寿の記念写真＞

ありし日を偲ぶ

昭和二十五年八月十三日の朝、私はいつもと変わらぬ母に見送られて潟門徒の棚経に出かけ、夕方寺に帰るとすでに母は倒れて危篤だとあわただしくごった返していた。折からお墓参りの人々がひきもきらず、墓地にはあかあかと灯明がともされ本堂のおつとめが終わるころ母は息をひき取った。血圧が高く病んではいたが、まさに急死であった。

父は母の死出の旅姿の画に添えて歌を詠み翌年のお盆までに幅をつくった。粗末な紙表装ではあったが、その後よく居間の床の間にかけられた。「八月十三日墓参の夜俄（ニハカ）にみまかれる妻を憶（オモ）ひて」の詞書で「万霊を待つ迎火におくらるるきみがゆくさきあかるくあらむ」とある。画はススキと灯籠を背景として白布をかむりハギの模様をあしらった衣をまとっている。父が好んで庭に植えたのがハギである。母にとって地上の迎え火が送り火とはなった。「あかるくあらむ」には願望ともとれる手向けの心がにじんでいる。私がさかしらに「ゆくさき」を「ゆくへは」とかえてみてはといったとき、「それではどこへ迷うてゆくかわからぬ、ゆきさきは定まっているのだ」とピシッとたしなめられたことを今もはっきりおぼえている。

母の写真はほとんど残っていない。ようやく古い古い写真が一枚見つかった。抱かれている赤ん坊は今は白髪まじりの現住職である。



記念品に「仏教聖典」も

梵鐘再建落慶法要の記念品としてお経本入れ（遠隔地郵送分は台付富久紗）のほかに仏教聖典をもれなく一冊さしあげることになりました。どの宗派の方でも読める仏教の真髄を伝える聖典で国内はもちろん世界中の主なホテルの客室や病院などの施設に寄贈され常備品として仏教精神の普及に役立っております。お経というとすぐむずかしいと考えがちですが、この聖典は分かり易く、だれでも読める、読んで心の糧となる、いわゆるお経ではない聖典として世界の各国語にも翻訳されています。ぜひ御一読を願います。

〈短歌〉　観音寺　森田一美

海熟るる午の日盛りの坂下る人なき御堂の鈴振って見る

白蛇を祀りし祠の神ときく巫女の神力畏みて受く

落日の今日も暮れゆく廃駅の駅のたまりに秋虫の鳴く

落日の光りの及ぶ波止場にて今夜出航の人夫と憩ふ

灼熱の中の荷卸し続けゆく汗は淋漓と滝のごと落つ

髪の毛の寄進者

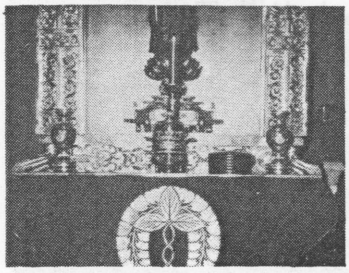
梵鐘の吊り金具にとりつける座布団の中に収める髪の毛の寄進をお願いしましたところ次の方々から御協力を頂きました。ありがとうございました。（敬称略）

東京　小林たけ、飛鳥井たつ子、大熊哲子　柏原訓子、飛鳥井千代、麓　中村タノモ、平岡ミヨ、山岸タマ、広沢ヤマ、鈴木タセ、堀内美佳子、武石礼子、武石加奈子、弥彦　武石美代子、金池　浅田　房、長崎　竹之内トラ。梵鐘を護る髪の毛を通して永く鐘の撞かれる度に御縁を結んで頂くことになります。

四具足の寄進

戦死された御主人の永代供養に

麓二区の広沢ヤマさんから本堂の御本尊上卓に用いる四具足（一金拾七万円）が寄進されました。写真のとおり仏光寺派御正紋入りの華瓶一対に燭立、火舎香炉の四点一組の仏具。昭和十九年南方で戦死された御主人 茂二十八歳、法名釈忠成の永代供養のためにと寄進され六月六日の永代経法要に御披露申し上げました。



昭和59年度当寺勧金決算書は去る一月二十一日の定例各字総代会議で左記のとおり承認されましたので御通知申し上げます。本年度の寺務経常経費につきましては鐘楼再建事業の決算後、総代会議にはかり処理することになりますので御了承願います。

門徒各位　広福寺住職・世話方一同

〔収入の部〕

科目	決算額	予算額
勧金	3,010,000	2,500,000
雑収入	155,200	0
預金利息	77,672	64,964
繰越金	51,358	51,358
計	3,294,230	2,616,322

雑収入は本山からの還付金ほか。事業費は心光寺御本尊宮殿に100万円　本山御遠忌賦課金懇志に498,240円　鐘楼解体に74,000円を支出。

〔支出の部〕

科目	決算額	摘要
寺務経常費	(1,569,194)	
負担金	467,248	本山護持金ほか
事務通信費	60,658	複写・郵便料
会議費	107,363	鐘楼視察含む
教化費	431,100	御布教・説教台等
営繕管理費	428,025	除雪，屋根修理ほか
門徒交際費	74,800	見舞，謝礼
事業費	1,572,240	
繰越費	152,796	次年度へ
計	3,294,230	